

大学

アーカイブス

関東地区大学史連絡協議会会報

1990. 1. 25 No.2

Association of College and University
Archives of Kanto Region

1989年11月22日(水) 研究部会(講演会)

カードからディスクへ—高機能パソコンによるシステム構築—

長尾文雄氏(関西学院学院史資料室事務長) 講演「年史編纂支援システムとしての資料室の課題」を聞いて—

立教大学図書館大学史資料室 中野 実

1989年11月22日(水)、第7回研究部会として中央大学駿河台記念館にて上記のテーマについて、長尾氏の講演が行われた。参加者は今回新に加入された大乗淑徳学園を含めて24校、35人であった。以下、当日の配布資料と筆者の拙いメモにより、講演概要、感想などを記してみたい。

講演概要

講演は「関西学院広報」124号(1989. 1. 31)に掲載された同資料室記事にそって行われた。その記事構成は「質の高い第1次資料の収集・保存」「公文書館機能の確立」「『新月文庫』発足」「『図録関西学院100年』(仮称)の編集支援」「年史編纂支援システムの構築」「資料展示室の設置」である。なお、同記事には資料室の業務と年史編纂などの相関関係を表した図が掲載されている。ここでもその図(次頁に掲載)を再掲し、以下の紹介文の参考にしていただきたい。講演概要是ほぼ記事構成にしたがって記す。

まず、学院史資料室の概要について。同室は1978年に発足し、「関西学院の歴史を明確にする資料を収集・整理・保管・運用する」という基本的な業務を行っている。学院長直属の機関である。スタッフは現在、専任2人、専任嘱託4人、アルバイト2人の8人構成である。このうち、専任嘱託の内訳は停年退職

された職員1人、日本史、東洋史、神学を専攻した学部卒業生3人である。彼らは來たるべき100年史編纂に際しての各執筆員の調査員として位置づけられ、原稿整理なども行う。資料室は原則的には年史編纂を背負い込まないのであって、資料の収集・整理・保管に徹する、年史編纂にかかる一切の調査活動を一手に引き受ける、という姿勢である。しかし、今回上梓された図録『関西学院の100年』の場合は、時間が限られていたため、資料室が全面的にバックアップすることになった。

ところで、これまでの関西学院における沿革史誌の編纂は、40年史、50年史、60年史、70年史とほぼ10年間隔で行われてきたが、そのあとが続かず30年のランクが生じていた。今回の100年史編纂事業を契機として、一方で従前の年史編纂にあたって収集された諸資料を整理しつつ、他方より質の高い第1次資料をあらたに発掘し、迅速な検索が要求されている、とのことであった。その手始めが図録の編集であった。

資料室が質の高い第1次資料の収集と保存とに邁進できるには、何をおいても学院内でその果すべき役割がはっきりしていることが必要である。また、存在そのものが全学的に認知されなければならない。そこで、同室は学内において公文書館機能の確立を目指し、努力を始めている。たとえば、文書規程に明

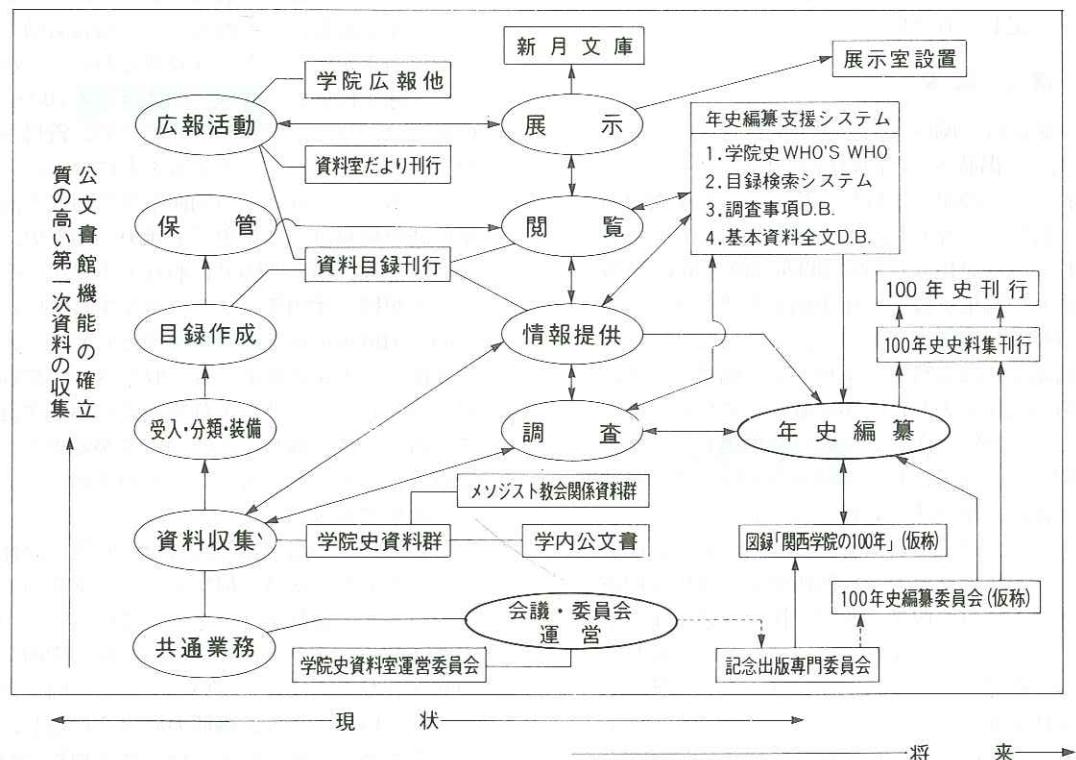
記された学内公文書の同室へのスムーズな移管など、学内各部課の業務と連携を深め、学内の信頼に応え得る整理・保管・活用方法を確立しようとしている。その際の参考として、アメリカの大学アーカイブの現地調査も行った。収集した資料はこれまで7冊の冊子目録として刊行している。近代日本の私学の一翼を担っているキリスト教系の学校にあっては、その創設の多くが在外のミッションボードによっている。このため、海外の資料調査は欠くべからざる課題である。同学院においてはすでに在米のメソジスト監督教会関係資料の収集を完了しており、閲覧に供している。国内の資料収集は専任嘱託者の関係からいもする式に行っている、とのことである。

史(資)料室アーカイブは基本的に(公)文書を取扱っているが、図書館とは現状では密接な関係を持つ場合が多い。同室では、昨年末に図書館と連携して、学院の教職員・卒業生の著作を収集・展示する「新月文庫」を発足させ、積極的な収集活動を展開している。教職員の範囲は、在任中を中心にして

て非常勤講師は除いている、とのことであった。

さきに触れたが、図録の編集では全面的なバックアップ体制をとり、資料調査・情報提供を行った。この支援を通じて、次の100年史編纂に向けてのデータとノウハウの蓄積に取り組んでいる。なお、図録についてはのちに紹介する。

以上のようなことを踏まえて、同室では「年史編纂支援システムの構築」を指向している。この点につき広報記事には次のように書かれている。「年史編纂の支援は地道な調査と資料発掘活動である。そのためには訓練された有能なスタッフの確保と養成に加えて、蓄積されている資料の中から必要な情報を検索する支援システムの開発が必須である。」ではどのようなものが構想されているのか。それは、学院史WHO'S WHO、目録検索システム、調査事項D.B.、基本資料全文D.B.などであり、高機能パソコンによるシステム構築である。たとえば、関西学院データブック、統計図表の作成などで、それらを視覚に訴え





1989. 11. 22 研究部会で講演する長尾氏

るかたちで提供できる。また、すでに学生新聞の記事索引はパソコンに入力済である、とのこと。このように、同室では今後、蓄積されたデータ（資料）のコンピュータ入力によるデータベース化に主力を置いて行くとしている。

最後に、資料展示室の設置であるが、これは近い将来の課題として「関西学院という共同体に自らのアイデンティティを共に考える材料を提供する」ために必要である、と書かれている。

以上、当日の質疑を盛込みながら、概要を記した。このほかに、資料の修復、写真の整理、テープ・ビデオなどの保存についてなどの質問があった。

なお、講演後の質疑のなかで、関西地区における大学史担当者会議の動向が報告された。

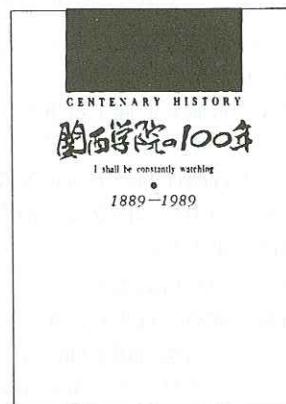
感 想

今回の講演は実に刺激的であり、示唆的であった。そのうちの一つだけ記せば、資料の活性化とデータベースの蓄積、という点である。筆者の貧しい年史編纂の経験から強く感じた。収集・整理された資料あるいは史実を一人の人間（一人の専任）の頭の中にだけでなく、編集主体全体あるいは大学全体の共通のものとすることが、資料の活用であり、資料が生きることである。そしてそのことをどのように具体化するか。暗中模索の中、いまだ手工業的にカードを作成し、検索を行っている筆者には、コンピュータ入力によるデータベースの蓄積はこれが高度情報化社会における年史編纂支援システムである、と面前で教えられたような気がする。昔風に、時勢の

然らしむところなのか、といっては消極的だろう。継続性、効率性などを考えると、それぞれの史（資）料室において、固有の環境条件の下で勇猛果敢に取組まなければならない課題であるのだろう。

『関西学院の百年』（図録）— I shall be constantly watching —について

体裁はB5判、横組、本文208頁。構成は本文、英文による百年小史—First One Hundred Years of Kwansei Gakuin : An Interpretative Review（小林信雄）、略年表、収録図版一覧、沿革表（付録）などからなっている。本文は100年の歩みを8つの時代に区分して構成されている。章題は、校歌「空の翼」の歌詞から、それぞれの時代を勘案した言葉が選ばれ、また、章のタイトルは、関西学院の歴史に刻まれた、その時代の動向を表す聖句の言葉が採用されている。たとえば、風の章—真理は汝らに自由を得さすべし—創設者と先駆者たち、1889～1909／光の章—Mastery for Service—希望に燃える原田の森、1910～1939／旗の章—粉碎か創造か—紛争の嵐を超えて、1967～1977などである。



各章は7～10個の節が置かれ、各節には800字前後の解説文が付され見開き2頁にまとめられている。かつ、キャプションには邦文とともに英文までも掲げられている。

ここ数年における図録編集の充実ぶりには目を見はるものがある。本書も英文の多用などであらたな図録編集の方向を提示している。

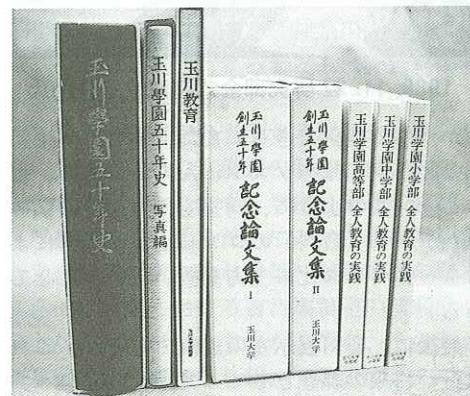
1989年7月19日(水) 研究部会報告

史料収集と分類整理の一試案

玉川大学図書館 学園史料室
岩淵文人

玉川学園創立50周年に向けて設置された学園史(資料)編纂室は、50年史完成後も「学園史料室」として、諸資料の収集を始め、分類、整理、保管、活用の業務を続けてきました。幼稚園から大学院まで有る当学園では、単に大学の史料室と言うよりも、学園全体の史料室として業務を進めなければならないだけに、その範疇も広く、加えて50年と言っても、その歴史的足跡は多岐に渡って記録を綴り続けて居ます。時間と共に消え去る物も多い中で、如何に後進へ史料として残すべきかを考慮し、取捨選択を行なうかが当面の課題でもありました。しかし当時には、収集から分類、整理、保存、活用に関して書かれた参考資料や図書等を見つける事が出来ませんでしたので、先哲の御意見を参考に、独自の道を歩む事になりました。幸い50年史作成に当たっては、各部に初代当時からの事を良く御存じの方々も多く、大過なく編集が進みました。この業務内容を基礎として学園史料室が発足になりましたので、史料として収集する内容も釐りながら概要把握する事が出来たのです。しかし収集して行くに従って、収集されて居るものは断片的な史料が多く、過去に遡る毎に不足の史料が目立ち、補充を重ねる努力を続けてきました。

初期の内はその史料数も少なく、それなりに利用も円滑に進められましたが、資料が増加するに及んで、当然分類整理の基本を立てなければ活用が不十分になる事態が発生し始めました。しかも、たった一枚の資料からでも読み取れる内容は数限りなく有りますので、図書の分類、博物の分類、果ては生物の分類迄色々検討して見ましたが、史料の活用から考えると一長一短が有り、ついには、応用分類学や複式簿記的考え方を考慮して、活用を中心とした独自の検索目録を作り、分類は保存ではないと、別に考えることに到達したので



した。要は如何に短時間で検索し、実物を探し出せるかで有ると割り切る事にしました。

活用に供する為に利用状態を考慮して、返答の所要時間を返事に加える事。実物の紛失を考慮してコピーを渡し届ける事等を中心に業務を進めてきました。

ここに業務のすべてを披露するスペースも有りませんので、幾つかの要点を紹介して置く事に致します。

収集雑記

良いリンゴは農夫の足跡の数しか実らないの例えの如く、依頼するより直接自分の足で、進んで出向くと思わぬ収穫が付随して来ます。

重複資料でも提供者の思い出や関係資料と共に纏めて保存する事によって、種々の資料群から探し出す手間を省く事が出来ます。図書館の重複図書的な考え方と異なって居ます。

撮影や録音は常に自分の技術を磨く事。シャッターチャンスは自分の実力しか写せないと考えて、内容の熟知と技術の向上、更にその環境や風景、雰囲気等も加えて置きたいものです。貧欲になる事が意外な資料を収集出来ると共に、行事等の目立つ内容と共に、普段の何気ない史料が求められる事も考えて置

きたい一つです。

借りて来るより出来るだけその場で複写する事。助手のメモの代りにネクタイピンマイクと録音機に独り言で記録して来ると能率的な取材も可能になりました。黄色く変色した写真でもムダと思わないで複写して見ると案外良く複写出来る様です。

インタビューは時に応じて隠しマイクと2台を使い分ける事によって本音と立て前の記録も、でもこれは……。

録音の最初に音声でもタイトルを入れて置くと、後の整理に便利です。

分類概要

目録の分類は、活用によって大きく内容を分け、年次別、部別、項目別、特定事項別、と年表を関連させて重複記入の形で行なって居ます。

年次別資料目録 基本台帳的な考え方の下にその項目の発生年毎に分けて記載し、年表と対比して活用出来る様に考慮して居ます。追加補入による順番訂正が起きますが、項目の年号が分かれば検索には便利です。関連行事等についても捜し易い様です。

各部別資料目録 資料について利用が多いのは、各部よりの問い合わせですので、関係部毎に内容を記入して居ます。行事を始め、幾つかの分類項目を決めて有ります。

項目別資料目録 各部に共通な事項を総合一覧表にして、抜け落ちを防ぐ目的で作りましたが、逆にこの表から資料を捜したり、収集も行なえるので便利です。

特定事項資料目録 主要な行事を始め、収録する事によって全体の内容を把握する事が出来る内容については、特別に別の目録を作り関係事項、資料の種類や内容、更に機関誌等の関係出典、録音、写真その他参考事項等についても細かく記入を行なって居ます。

年表 何でも出来るだけの内容が書かれて居る年表を計画して居ます。その項目は次の様に分けて居ます。行事、学内活動、対外活動、人、来園者、その他に分けて日付、部別、内容主題、出典、を各種の資料から記載して居ます。現在複雑な入力ばかりで、出力の少ない理由や紙の洪水を懸念して、コンピュー

ターの利用は考えて居りません。

保存雑話

これらの分類はあくまで検索の対象として作成したもので、保存についてはその中味迄を分離して個々に分類に準じて整理するより、その資料群自体の関連性を保つ事にも留意して、大きく分けて保存して居ます。従って各資料目録には所在を必ず記入する事にして居ます。

博物と異なって何時でも実際に使用出来なければ、いくら十分な保存が出来ても、死蔵になってしまいます。そこでコピーを作ってでも2部保存する事にして居ます。

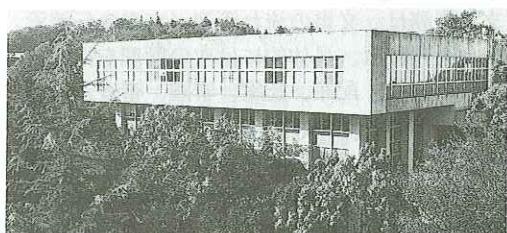
現在悩みの種としては、直接目で見ることの出来ない資料、例えば、録音やビデオ等の再生機器を通じなければ使用出来ない資料の検索と分類整理、旧式機器の確保や保全です。

時代と共に進歩していく中で、貴重とされる内容でも再生出来ないで、活用されないままの史料を、いかに活用出来る状態にするかが早晚課題となる事でしょう。

ここに記しました内容は、あくまで私の独断と偏見による史料室の愚痴話の一つで有って、完成された収集分類法とは言えません。それでもやるっきゃ無いと開き直り、頑張って来た一端を批瀝したに過ぎません。

キリストは他人から与えられた使役に対しても進んで二里行く事を教えましたが、出来るならもう一里進んでやって上げることこそ、人に喜ばれる仕事では無いかと思って居ます。

徳川家康が「人の一生は重き荷を負って遠き道を行くがごとし、急ぐべからず」と遺訓に論された様に、これからも重荷を担ぐと言うよりもウエイトリフティングで自分の体力増進をするつもりになって、頑張り通して見たいと考えて居ます。



玉川大学図書館

文書管理と公文書館

東京都公文書館 水口政次

1. はじめに

公文書館のような史料保存利用機関に勤める者が、なぜ表記のテーマを報告するかについて若干説明したい。まず、北海道立文書館の佐藤京子氏の論文を引用する。「公文書は、各自治体自身が今、残す努力をしなければ、永久に失われてしまう貴重な資料である。しかも、それは無料で入手できるオリジナル資料なのである。」(「赤レンガ」第5号 昭和63年6月) (下線は筆者) この引用文でわかるとおり、公文書館の主な対象資料は原課で作成される文書等である。そのため、原課の文書管理がきちんと行われなければ、公文書館に文書等が移管されず、公文書館の機能も十分発揮できない。公文書館の機能が十分発揮するためにも、原課の文書管理に注意を向ける必要があるし、常に適正な文書管理に向けてのシステム作りを提案しなければならない。言い換えれば、公文書館という最終の文書等保存施設から見ると、原課の文書管理の現状がよくわかるからである。

2. 文書管理とは？

一般に文書管理とは、文書実務全般にわたる円滑かつ適正な実施のための管理をいう。つまり、文書実務の管理といえよう。では、文書実務とは何かというと、組織体における各種の情報を文書によって処理する活動であるといわれている。まさに、組織体は、その活動を文書によって処理している。これがいわゆる「文書主義」と呼ばれるものである。文書実務は、文書の流れ管理(文書の伝達管理とも呼ばれ、具体的には次の管理を指す。文書の收受、配布、起案、審議、審査、協議、決定、浄書、照合、押印、発送)と文書の保存管理(文書の保存機能ともいい、次の管理を指す。文書の整理、保存、廃棄)の二つで構成立っている。ここでは、主に東京都の文

書保存管理の現状について話したい。

東京都の文書管理規程は全部で52条あり、保存関係を規定しているのはわずか5つの条文である。この中に長期保存文書(他の地方公共団体では、永久保存文書とか永年保存文書といわれている)の東京都公文書館への引継ぎに関する条文がある。東京都の場合(知事部局と呼ばれる22局等)、文書完結後3年目に各課長は長期保存文書を東京都公文書館へ引継ぐ義務がある。

規定の点からは、大変整備されているように思われるが、現状は不十分である。文書の引継ぎが不十分な理由は、次のようなものである。一番多い理由は、利用頻度が高く、そばに置かないと仕事にならないということである。一応もっともな理由に見えるが、職員が文書等を離したがらないとか、引継ぎの手間が大変だという心理が潜んでいる。それに加えて、都庁内で文書管理が十分に機能していない点、それに伴って公文書館の機能が認知されていない点、文書等が持つ歴史資料としての重要性が理解されていないことも大きな理由と思われる。

3. 文書のライフサイクル

前のところで、東京都における文書管理が不十分であることに触れたが、では、どのような打開策があるだろうか。ここでは、考えるヒントになりそうな資料を提供したい。

二つの資料を紹介したい。一つは、沖縄マイクロセンターの渡口善明氏が書かれた「琉政文書がうったえるもの」(1985年3月 自費出版)である。もう一つは、「記録管理と文書館」(第1回文書館振興国際会議報告集1987年9月)である。渡口氏は、沖縄県から琉球政府文書の整理を委託され、その経験の中から「行政文書を秩序ある流れにかえるために」と称して、全序的な文書集中管理への提言を行った。「貴重な文書が紛失したり、



東京都公文書館

廃棄されたり、抽出し得なくなるのも、もとはといえば文書の滞留が原因である。このような事態に陥らないために、行政機関のすべての文書に円滑な流れをもたらす事が肝要である。」このため行政文書館を設置して、文書の円滑な流れを持ち得るとしている。すなわち、「文書の廃棄は各課で行わずすべて行政文書館に一任するシステムを構築する」という。次に、「記録管理と文書館」であるが、これは、皆さんもよくご存じの3年前（昭和61年8月）に開催されたイギリス国立公文書館副館長マイケル・ローパー氏（現在は館長）の講演会の報告集である。ローパー氏は、この講演の中で「記録のライフサイクル」について話され、多くの人々を感動させた。それは、原局における現用記録としての第1段階、中間期の半現用記録としての第2段階、非現用もしくは保存すべき史料としての第3段階である。第1段階の保管場所は、原局の事務室であり、第2段階は記録センター（中間保管庫とも呼ばれる）、第3段階は文書館であると説明された。記録（あるいは文書）の流れが見事に示されている。また、ローパー氏は、第1・2段階を総称して記録管理（レコード・マネジメント）といい、第3段階を史料管理と呼ぶ。

4. 公文書館とは？

東京都公文書館は、組織的には総務局総務部に属しており、いわゆる首長部局の所管である。知事部局22局等の長期保存文書の引継ぎを受け、また、有期保存文書を歴史・文化的資料として評価・選別した後に収集し、更に、行政刊行物を収集し、受け入れた後に整理・保存して、行政利用や一般の利用に供す

る機能を持っている。当館の特色の一つは、都に関する修史事業である。これは、明治35年まで遡る大変歴史の長い事業であり、現在も「東京市史稿」として編纂刊行されている。東京府と東京市の公文書を中心とする都政史料の収集・保存事業は、この史料編纂事業により実質的に促進されてきたといつても過言ではない。当館は昭和43年10月開館したが、その前身は都政史料館である。この館は昭和27年11月に開館し、編纂事業を中心にして、一部公文書を含む都政史料の保存・管理・閲覧を行っていた。当館の母体（都政史料館の前は東京市史編纂室）が修史事業を中心にしていたこともあって、史料の収集・保存に対する担当者たちの強い思いが感じられる。第二次大戦中には修史事業は一時中断されたが、担当者が史料や編纂原稿を埼玉県や多摩地区に疎開したことからもそうした熱意が窺える。そういう先人達のお陰で、現在さまざまな貴重な史料を行政と住民がともに共有できるのである。

5. おわりに

今まで東京都の事例を紹介しながら、文書管理と公文書館について述べてきた。もちろん、東京都の文書管理と大学の文書管理とは、かなり異なると思われる。また、公文書館の機能と大学史編纂室の機能も多くの点で違うとも思われる。しかし、すでに述べたように当館の沿革は市史編纂室であり、大学史編纂室と同様な仕事を行ってきたはずである。東京都も大学も組織体という点では、全く同様である。組織体史の編纂事業においては、組織体で作成され保存された文書等で自らの歴史を編纂すべきであろう。もちろん、組織体で作成された文書等は、編纂事業のためだけに保存される訳ではなく、組織体のみならず広く地域の文化遺産として活用されるものである。組織体の中でそういった認識ができるのは、公文書館のような史料保存利用機関や自治体史・大学史等編纂室である。組織体のアイデンティティをしっかりと確保するためにも、組織体の文書管理に目を向け原局から然るべき文書等が流れてくるような仕組みをどのように作るか大いに議論すべきであろう。

会員校紹介

専修大学年史資料課

当年史資料課は、庶務部に属し総スタッフ4名で資料の収集並びに整理等に追われております。

今年は特に創立110年を記念して『専修大学110年(写真史)』の編纂にあたった。また、過去においては百年史上・下巻、百年小史、105年(写真史)等の刊行をしている。作成することももちろん重要ではあるが、その後の処理についても又、同様に大切であることを痛感している。減ることのない資料の管理、保存、写真の整理についても葛藤している。

しかし昨年は目標を定め、写真の整理に重点を置いた。1枚の写真からベタ焼、ネガ、ポジ、紙焼が一度に見られ、又それを年代別、項目別にしてファイル化した。同時に索引も作り一目で利用できる便利さも備えた。写真の数およそ2万枚、なかなか根気のいる仕事であった。このような作業が今回の「110



年」を作るうえではたいへん役に立った。

資料課の役割は、資料の保存、整理に加えて、その活用の仕方をいかにできるかによってその価値が問われる。しかし結果がすぐ出る華やかな仕事ではないが一つのものが完成したことへの喜びはまたひとしおである。

次の目標は全資料の目録完成を目指しているが、電算化の進む今日では、うまく波に乗れないのも、資料課の特質とも思いこれからも又息の長い道程ではあるが確実に歩んでいきたいと思っております。

東海大学資料室

東海大学資料室は、昭和55(1980)年7月法人組織・職制改正にともない理事長室資料編纂室として設置されました。そして同61年4月資料室と改称されています。この間、57年11月には建学40周年を迎えて記念式典に向けての大学史編纂、資料の収集・調査を行ない、そこで『東海大学建学史』『大いなる遺産を・東海大学建学40周年記念写真集』『東海大学史資料目録』を刊行しています。

資料室の主な業務は、法人に関する資料の収集・整理・保管、法人年鑑・年史の編纂・



作成となっています。

現在では、東海教育研究所とのタイ・アップによって資料の発掘・蒐集に努めています。なお、研究所からはこの成果をふまえて『松前文庫』を発刊しており、今後の大学史編纂の基本資料にあてています。

平成4(1992)年11月には、学園創設50周年を迎えることから昨年4月、「東海大学50年史」編纂の作業をすすめています。

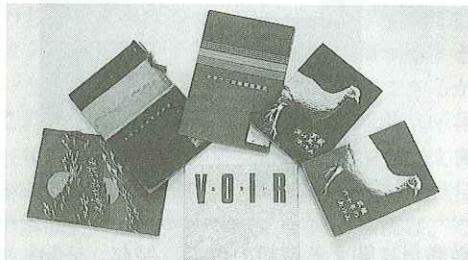
東海大学は、昭和17(1942)年12月静岡県清水市に航空科学専門学校を、ついで同19年4月には東京都中野区江古田に電波科学専門学校を開校しました。この他にも東京都港区高輪に電気通信工学校を付設しました。その後、東海専門学校、東海科学専門学校と校名を改め、旧制東海大学をへて現在の東海大学にいたっています。

東海大学関係資料について、情報がございましたら東海大学資料室・50年史編纂室(Tel 03-467-2211)へご連絡いただきたくお願い申し上げます。

武蔵学園企画室

武蔵学園（大学・高校・中学）は大正11年わが国最初の七年制高等学校（旧制）として誕生し、その後、昭和24年の学制改革により新制の武蔵大学・高校・中学が設置され、平成4年で創立70周年をむかえる。

これまで本学園の年史編纂事業は特定のセクションが日常業務として携わってきたわけではなく、周年事業の一環として「年史編集委員会」が設置され、その都度年史を刊行してきた。現在まで、『武蔵高等学校六年史』（昭和3年刊）、『武蔵高等学校十年史』（昭和7年刊）、『武蔵高等学校二十年史』（昭和16年刊）、『武蔵五十年のあゆみ』（昭和47年



刊）、『武蔵六十年のあゆみ』（昭和57年刊）がそれぞれ刊行されてきた。

また、平成元年度には大学が創立40周年をむかえたのを機に大学および大学同窓会の共同編集による『V出〇会IいR 一武蔵大学創立40周年記念誌』が刊行された。この記念誌のユニークな点といえば、学園史として当然要求される資料的裏付けによる正確さを踏まえつつも、従来の年史にみられるような堅苦しいものにならないように配慮し、大学関係者および同窓生が気楽に手にとって読みたくなるようなものに編集したということであろう。

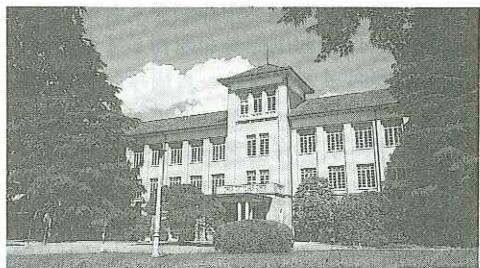
企画室は昭和63年6月に「学園の長・中期運営計画の策定業務および学園資料に関する業務を推進するため」学園長の直属機関として設置された。これは学園（法人）が、学園資料の収集、保管についても組織的に取り組んでいくという姿勢の現われであり、企画室としてもこれに積極的に応えるため、現在、計画の立案およびその業務処理について、大学・高校・中学との間で協議・調整し検討中である。

津田塾大学企画調査室

本学は1900年（明治33年）創立でありますから、西暦の下2桁と共に年輪を重ねているわけです。したがって来年（1990年）には90周年記念と言う事ですが、顧みて本学は創立以来極めて地味に節目節目をほとんど内々で祝ってきた伝統があります。

年史については、これまでに40年史、60年史が出版されていますが、これらは共に、本学に長く在職した個人の努力によって為されたもので、部局または委員会としてこれを為したことはありませんでした。

規模の大変小さい学校ですから、これまでには事足りてきたのでありますが、時代も変わり、さすがにこのままでは累積する資料の整理や散逸を防ぐ事はできず、対策を講じねばと考え始めた矢先、当時NHK、その他でも報道されたので或いはご存じの方もおられるかとも思いますが、本学の屋根裏から創立者



津田梅子の大量の書簡類が放置された状態で発見されるに至りました。

我々はこの事態を反省して急遽梅子資料室を発足させてその整理と解明に当たることとし、続いてこれとは別に史料室を設置して対応することと致しましたが、小規模の学校ゆえ史料室を単独で維持することが困難になり、現在は企画調査室の一部門として、90周年に向けて、他大学ではすでに多くの実績のある写真による年史の発刊に努めているのが目下の実情であります。

東洋大学創立100年史編纂室

東洋大学は、明治の哲学者井上円了が、明治20（1887）年、東京本郷の龍岡町に哲学館を創設してから、昭和62（1987）年をもって創立100周年を迎えました。

その記念事業の一環として、「100年史」、「図録」の刊行および「記念映画」の製作が企画され、現在までに『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上・下、『図録 東洋大学100年』、映画「百年からの出発—明日をめざす東洋大学ー」（第26回日本産業映画・ビデオコンクール奨励賞受賞）の完成をみるに至っています。

これらの事業の実務を創立100年史編纂委員会の下において行っているのが、昭和58年4月に設置された当編纂室です。

本学ではこれまでに、「五十年史」、「八十年史」が刊行されていますが、その編纂に使われた資料は多くが散逸し、100年史編纂のためにはまた一から資料の収集を行わなければなりませんでした。まず、基本資料である公文書を、国立・東京都の両公文書館でおさ

え、学内資料も各事務局の協力の下収集に努めました。校友の方々から多くの資料を集めることができました。この間には『東洋大学史資料目録』（一）・（二）が発行されています。

そして、100周年の翌昭和63年7月に編纂室は改組され、それまで記念事業事務局の下に位置づけられていたものが、独立した事務局となりました。現在、教員4名（兼担）・職員5名（内嘱託3名）・制作1名・長期アルバイト3名のスタッフにより、未刊の通史編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（部局史）、資料編Ⅱの刊行に向け鋭意努力すると共に、多くの方々のご協力により収集した貴重な資料の、新たな整理・保存システムの開発を計画しています。



國學院大學校史資料室

当室が発足したのは昭和53年4月であったが、当初、図書館副館長が兼務して業務が行われた。59年4月に至り、百周年記念館が竣工し、その一隅に記念室（展示室）が設けられたのを機に、スタッフ2名を増員して業務を拡大した。

当室は発足以来、事務局に所属し、委員会制度を導入することなく独立して自由に運営するよう配慮し、途中から課より上の部に位置づけ、当室設置の必要性を闡明にした。当室は主に法人や大学、付属の幼稚園、中学校、高等学校、短期大学、幼児教育専門学校、その他関係教育機関、および卒業生、在学生、



教職員に関する資料の蒐集、保存、公開、調査・研究、編纂を業務としている。また外部諸機関からの資料提供依頼にも適宜応じている。記念室における公開展示は常時行っており、大学の歴史を語る主要な文書類をはじめ、本学や日本大学の経営母体であった皇典講究所の初代総裁で皇族の有栖川宮熾仁（たかひと）親王の真筆、同所初代所長で司法卿の山田顯義伯の書幅、アイヌ語研究の泰斗・金田一京助先生、民俗学者で歌人の折口信夫（おりくち・しのぶ、釈道空）先生、万葉學の武田祐吉先生、神道・国学者の河野省三先生をはじめとする諸先生の歌幅、さらには著名な卒業生の業績、遺品、写真、その他関係資料を展示している。

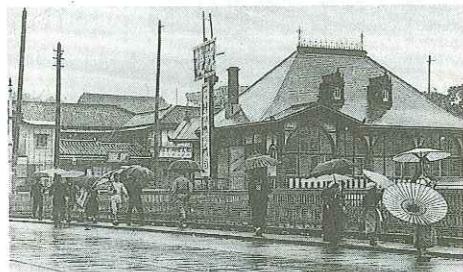
現在、当室は昭和57年の創立百周年を記念して出版した百年小史に続き、本篇ともいえる百年史（約千頁予定）の編纂に入っているが、出版予定も大幅に遅れ、とにかく平成2年度までには実現したいと、鋭意努めている。終了後は卒業生を対象にした聞き書き調査を行う予定にしている。

明治大学歴史編纂事務室

明治大学の起源は、明治14年1月17日、明治法律学校の開校による。以後、『明治法律学校20年史』（明治34年）をはじめとし、60年史（昭和15年）まで刊行されてきた。したがって、この度の100年史刊行は実に40年振りである。

明治大学100年史の編纂は、創立80周年編纂（昭和36年）に遡る。80年史編纂過程において、大学史編纂のための資料の未整備状態が判然とした。この反省のもとに、昭和37年、当時の広報課内に歴史編纂資料室が設置され、今日の歴史編纂事務室への発展につながった。資料室は、報告集『田島義方文書目録』（昭和42年）の刊行を皮切りに、以後、第16集

（昭和59年）まで刊行した。昭和56年、創立100周年を迎えて、記念事業の一環として『図録明治大学百年史』（昭和55年刊行）、『明治大学百年史』（全4巻、史料編2巻刊行）、『明治大学史紀要』（現、第7号）の刊行が計画された。編纂にあたり、各学部の日本近



明治30年代の御茶水橋

代史関係研究者から成る委員会が組織された。資料室は、昭和62年5月、従来の広報課から総務部歴史編纂事務室に組織変更された。現在、専任職員5名、調査員5名から構成されている。

委員会及び事務室においては、100年史編纂業務とともに、将来における資料保存の基盤ともなるべき「大学史資料館」の設立に向けて、既存資料の整理と新たな資料発掘に鋭意努力している。この度導入した電算化処理もその一環である。

国士館資料室



昭和62年秋、学園創立70周年記念事業の一環として本学在職OB会が国士館資料室の設置基金を拠出したことに端を発し、急拠この年12月資料室準備委員会が発足、開設準備に着手しました。なにぶんにも零からの出発であり、1年4ヶ月という短い準備期間のため心急くままに試行錯誤を重ねながら、なんとか今年4月14日国士館資料室の開設に漕ぎつけました。しかしながら以上の経緯のため、出来上った資料室の実態は理想とする目標にはなお遠く、ようやく基盤確立の緒についた段階であります。

資料室開設後、実務は総務部広報課が引き受け、担当者1人をおいて見学者に対し展示資料の案内説明をする傍ら集ってくる資料の整理を行っております。今までに収集した資料は約2,400点（うち展示品200点）、このほかに未整理のものを多数かかえています。内訳は大正6年の創立時から戦中、戦後の苦難の時代を経て現在に至るまでの学生、教職員OBを中心とした写真、アルバム、文書、文献、書画、制服、帽子、メダル、賞状など多岐にわたっております。これらの品々を収納する国士館資料室は世田谷キャンパスほど近く世田谷区役所前の柴田会館内にあります。室内はいささか手狭ですが資料を公開展示する展示室、事務室兼資料保管室及び倉庫からなっております。

付言すれば近く学内に資料室運営委員会の設置発足が予定されており、資料の収集、整理等についても協力が得られる見通しです。なお本学でも学園史編纂を待望する声が多くなりつつあり、早晚避けて通ることができなくなるものと予感しております。

成蹊大学・学園史料室



昭和58年4月に創立者の中村春二記念室が開設され、これが母胎となって昭和63年11月学園史料館が開館しました。

学園史料室は昭和62年10月事務組織改変に伴い新しくできた部署ですが、組織的には法人部局に所属しており、大学に直属しておりません。

所管事項としては、①中村春二記念室に関する事項 ②学園史料の収集・整理および展示、保存に関する事項 ③学園年史に関する事項 ④学園史料館の使用管理、となっております。

史料館には中村春二記念室（写真）と学園史料展示室があり、発足以来この二室に展示すべき関係資料の収集・整理、展示方法の実際についての検討などを集中的に行い、目下これに関連した業務に追われている日常です。従って山積する資料について、整理、分類また目録づくりなどの面ではまだ暗中模索している状態です。スタッフの構成は現在、専任3名（室長、課長、課長補佐）、嘱託2名です。

学園史料室が設けられたのは、学園の正史を編む重要性が認識されたものと思われますが、戦後の史料の大部分は今のところ、大学、高、中、小学校の各部校にあって当史料室に移管されていない状況です。当史料室にある原史料は、明治39年の私塾創設時から昭和25年の旧制高等学校の廃校までのものが主体となっています。

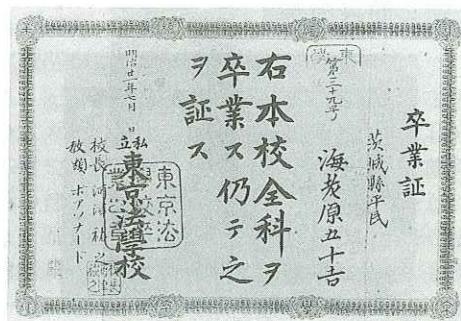
まだ組織だった委員会的なものもできていない現状なので、年史編纂に関しては基礎的な問題から取り組み、事実を裏づける資料の整備を遅まきながら進めているところです。

法政大学多摩図書館資料課

本学では、大学史関係業務を多摩図書館資料課が担当（地方資料室もある）しています。大学史関係は、参考1、課員1、パート・アルバイト1の構成になっています。

資料課は、総長の諮詢を受ける大学史資料委員会（教員4名）の事務局として、資料の調査・収集、整理・保管それに閲覧に関する業務と併せて、定期的刊行物の編集、発行にあたります。その一つは、学園の諸活動を年度ごとにまとめた『法政大学年誌』であり、いま一つは『法政大学史資料集』であります。ともに年1冊の刊行です。資料集は百年史編纂過程に始まり、現在その第13集の刊行準備段階にあります。

資料集の刊行は、資料の調査・収集の成果如何にされます。本学の場合、戦災によって歴史的史料は灰じんに帰していますので、専ら学外の調査にまたなければならないのが実情です。こととし大いによつては、法政大学ボアソナード記念現代法研究所との協力共同



による調査を行なうこともあります。資料収集といえば、最近、近年にない収穫を得ました。ある教授からの情報によつたものですが、それは明治21年の卒業生が残した講義筆記録（約560丁）、卒業証書（写真参照）などです。

このようにして、事務局体制に弱さを持ちながらも、将来の修史事業の基礎を徐々に築きつつあるというのが現状です。いま、大学史料展示室を構想しています。その実現が関係者から期待されているところです。

東京女子医科大学史料室・吉岡彌生記念室



東京女子医科大学は、1900（明治33）年、吉岡荒太・弥生夫妻の創設した東京女医学校をその前身とします。吉岡弥生は私立医学校済生学舎の出身ですが、母校が男女共学から生ずる風紀問題等により女子学生の締め出しを始めたために、女性が医師になる道が閉ざされかけたので、東京女医学校を設立し女性医師養成に尽力しました。同校は1912（明治45）年東京女子医学専門学校となり、旧制東京女子医科大学（1950年学部開設）を経て現在の東京女子医科大学に至っています。

大学史料室は1966（昭和41）年、創立65周年を記念した『東京女子医科大学小史』の編

纂のために収集された資料をもとに設置されました。図書館組織に所属し、東京女子医科大学の歴史及び創設者吉岡弥生の事績に関する資料の収集・整理・保存並びにその研究を目的とする機関です。1980（昭和55）年には創立80周年を迎えて『東京女子医科大学八十年史』も刊行されました。卒業生や女性医師一般、女性史、教育史等に関する資料・文献も収集しており、所蔵資料については『東京女子医科大学 大学史料室資料所蔵目録（1983年3月末現在）』にまとめられています。

吉岡彌生記念室（写真）は、女性医師の養成・教育に大きく貢献した吉岡弥生の業績を広く伝えるために1970（昭和45）年に開設され、所蔵資料の一部を常時展示、一般にも無料で公開しています。開室日及び時間は、月～金曜日が9時30分～16時30分、土曜日は12時迄、日曜・祝日は閉室日です。また、史料室ではレファレンス・サービス、書籍（『東京女子医科大学小史』『吉岡彌生伝』『吉岡彌生』）の販売も行なっています。史料室内の資料閲覧希望者は事前の連絡が必要です。

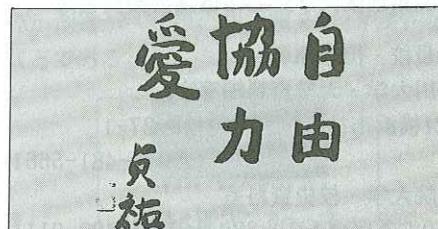
獨協学園百年史編纂室

明治16年に発足の獨逸学協会学校を母胎とする獨協学園は、現在、獨協中学校、獨協高等学校、獨協大学、獨協医科大学、同附属病院、同附属看護専門学校、同越谷病院、獨協埼玉高等学校、姫路獨協大学を経営する私学である。

1978年に、5年後の百周年を目指して百年史編纂委員会が設立され、全学園の力量を結集した形で、百年史関係事業を遂行することになった。委員会の下に編纂室（埼玉県草加市）を設け、編纂委員、調査助手・経理嘱託、アルバイト学生からなる実行部隊を編成した。

今までに仕上げた事業としては

1. 資料集『獨協百年』全5冊、全2千頁
— 内外の関係資料の発掘・聴き取り・復刻、公開したもの。
2. 写真画報『目でみる獨協百年』208頁
— 収集資料の中から、貴重な文献・史料を並べ、エピソードで綴った。
3. 『回想・天野貞祐』445頁



— 旧制獨協中学出身で、のち獨協大学の創設者、学長となり学園長として獨協学園を総括した天野博士の伝記資料集成である。

4. 写真集『あるばむ人間・関奏』182頁
— 天野博士に協力した東武系の実業家・関奏の一代記で、獨協学園の今日の「隆昌」の最大功労者の生涯を描いている。

現在は、本史『獨協学園百年史』全800頁（概説書）と『獨協百年資料集成』全1冊本（前出資料集の一部と新収集資料）の執筆及び編集を行なっている。

当面の課題は、百年史誌事業総括後、収集史料の展示、研究、紀要刊行と獨協学園史料館の設立である。

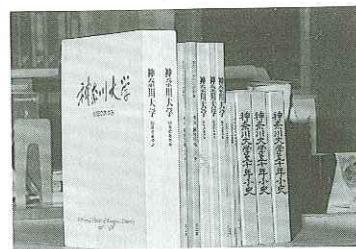
（編纂主任 齊藤 博・獨協大学教授）

神奈川大学資料編纂室

本資料編纂室は、1989年4月に発足したばかりで、現在、専任職員3名とアルバイトによって資料の収集・整理を中心とする業務を進めています。

本学の修史事業は、創立40周年を記念する『40年史』の刊行を目的に1961年に開始されました。大学紛争によって中断、1978年になって、改めて『50年史』の編纂に着手、1982年に『神奈川大学五十年小史』を刊行するに至りました。この小史刊行のために再開した資料の収集・整理業務は、小史刊行後も引き続き企画広報課の所轄として進められ、1988年には創立60周年写真集発行委員会が、それまでの収集写真、資料をもとに『神奈川大学—60年のあゆみー』を刊行いたしました。

こうした経緯を経て、恒常的な修史事業の必要性が学内各方面から出され、1989年4月、大学資料編纂室が開設される運びとなりました。本資料編纂室は、現在、これまでの収集



資料の整理・保存、学内外資料の収集業務と1984年から発行している『神奈川大学史資料集』を継続して刊行するとともに、資料の展示なども計画中です。

また、本資料室の当面する課題として、学内に分散している文書類の管理、保存体制の確立の問題があります。学内公文書の管理、保存体制を確立するためには、保管庫の設置や文書資料の統一的な分類・整理方法の確定、さらには学内における資料編纂室の信頼度の向上などがあげられます。現在、そのための基礎的な作業に取り組んでいます。この他、写真資料の整理、保存、利用体制の確立や物品資料の受け入れ保存についても検討中です。

関東地区大学史連絡協議会会員名簿

(会員校・担当部署)

神奈川大学・大学資料編纂室

〒221横浜市神奈川区六角橋3-27-1

(☎045-481-5661)

國學院大学・校史資料室

〒150渋谷区東4-10-28 (☎03-409-0111)

国際基督教大学・広報課

〒181三鷹市大沢3-10-2 (☎0422-33-3038)

国士館大学・総務部広報課 (☎03-487-9683)

〒154世田谷区世田谷4-28-1

(柴田会館・同区若林4-31-10 ☎412-6621)

実践女子学園・企画部企画広報課

〒191日野市大坂上4-1-1 (☎0425-85-0301)

順天堂大学・医史学研究室

〒113文京区本郷2-1-1 (☎03-813-3111)

成蹊大学・学園史料室

〒180武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

(☎0422-51-5181)

専修大学・庶務部年史資料課

〒101千代田区神田神保町3-8

(☎03-265-6211)

拓殖大学・総務部

〒112文京区小日向3-4-14 (☎03-947-2261)

玉川大学・図書館学園史料室

〒194町田市玉川学園6-1-1

(☎0427-28-3203)

大乗淑徳学園・本部事務局理事室百年史編集
事務局

〒174板橋区前野町5-5-2 (☎03-966-8681)

中央大学・広報部大学史編纂課

〒192-03八王子市東中野742-1

(☎0426-74-2132)

津田塾大学・企画調査室

〒187小平市津田町2-1-1 (☎0423-42-5116)

東海大学・資料室

〒151渋谷区富ヶ谷2-28-4 (☎03-485-4923)

東京経済大学・学長室企画広報課

〒185国分寺市南町1-7 (☎0423-21-1941)

東京女子医科大学・史料室

〒162新宿区河田町8-1 (☎03-353-8111)

東京農業大学・図書館

〒156世田谷区桜ヶ丘1-1-1

(☎03-420-2131)

東洋大学・創立100年史編纂室
〒112文京区白山5-28-20 (☎03-942-1469)
獨協学園・百年史編纂室
〒340草加市学園町1-1 (☎0489-42-1111)
日本工業大学・総務部資料室
〒345埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1-1
(☎0480-34-4111)
日本女子大学・成瀬記念館
〒112文京区日白台2-8-1 (☎03-943-3131)
日本大学・大学史編纂室
〒102千代田区九段南4-8-24
(☎03-263-5991)
法政大学・多摩図書館資料課
〒194-02町田市相原4342(☎0427-83-2281)
武蔵学園・企画室
〒176練馬区豊玉上1-26 (☎03-991-1191)
武蔵野美術大学・企画調査室
〒187小平市小川町1-736 (☎0423-41-5011)
明治大学・総務部歴史編纂事務室
〒101千代田区神田駿河台1-1
(☎03-296-4085)

立教大学・図書館大学史資料室
〒171豊島区西池袋3-34-1 (☎03-985-2693)
立正大学学園・企画広報室
〒141品川区大崎4-2-16 (☎03-492-5165)
早稲田大学・大学史編集所
〒169新宿区西早稲田1-6-1
(☎03-203-4141)

(個人会員)
安藤 正人 (国文学研究資料館史料館)
〒142品川区豊町1-16-10 (☎03-785-7131)
小川千代子 (国立公文書館公文書課)
〒102千代田区北の丸公園3-2
(☎03-214-0621)
小林 愛子 (上智大学総務部広報課史料室)
〒102千代田区紀尾井町7-1
(☎03-238-3294)
水口 政次 (東京都公文書館)
〒105港区海岸1-13-17 (☎03-432-8161)
(1989年12月現在・50音順)

関東地区大学史連絡協議会

1989年度総会議事録

日 時 1989年5月8日（月）14時～15時
場 所 私学会館5階会議室
参加校 22大学（33名）
開会の挨拶 中央大学（会長校）松身雄吉氏
議長の選出 議長 法政大学 大野健一郎氏
副議長 立教大学 石田 弘氏
議 事 1. 1988年度事業報告・同決算報告について（承認）
2. 規約の改正について（改正案を一部修正して承認）
3. 1989年度事業計画案・同予算案について（承認）
4. 役員の選出について（常任委員校の交代と1989年度新役員校に現役員を再任することを承認）

常任委員会議事録

第5回（1989年3月6日（月）16時～17時）
場 所 日本女子大学成瀬記念館
出席校 神奈川大学 玉川大学 中央大学

東海大学 日本女子大学 明治大学
小林愛子（上智大学）
議 事 (1) 1989年度総会について
(2) その他（日本工業大学の協議会入会を承認）
第6回（1989年4月14日（金）15時～17時）
場 所 上智大学史料室
出席校 神奈川大学 玉川大学 中央大学
東海大学 東洋大学 日本女子大学
法政大学 小林愛子（上智大学）
議 事 (1) 1989年度総会について
第7回（1989年6月28日（水）15時～17時）
場 所 中央大学駿河台記念館500号室
出席校 神奈川大学 玉川大学 中央大学
東海大学 東洋大学 日本女子大学
法政大学 明治大学 小林愛子（上智大学）
議 事 (1) 1989年度諸事業について
(2) その他（早稲田大学、武蔵学園の協議会入会を承認）
第8回（1989年7月19日（水）16時～17時）
場 所 中央大学駿河台記念館510号室

出席校 神奈川大学 玉川大学 中央大学
東海大学 東洋大学 日本女子大学
法政大学 小林愛子（上智大学）
議 事 (1) 1989年度の諸事業について
第9回 (1989年9月20日(水) 14時～15時)
場 所 中央大学駿河台記念館 510号室
出席校 神奈川大学 専修大学 玉川大学
中央大学 東海大学 東京経済大学
東洋大学 日本女子大学 法政大学
明治大学
議 事 (1) 会報『大学アーカイブズ』の編集について
(2) その他（講演会の開催について）
第10回 (1989年11月22日(水) 14時～15時)
場 所 中央大学駿河台記念館 620号室
出席校 神奈川大学 専修大学 玉川大学
中央大学 東海大学 東京経済大学
東洋大学 日本女子大学 法政大学
明治大学 小林愛子（上智大学）
議 事 (1) 来年度の事業計画について
(2) その他（大乗淑徳学園、水口政次氏（個人会員）の入会を承認）

研究部会記録

第3回 (1989年1月20日(金) 15時～17時)

ミニ情報

◇近刊予定◇

- 『東洋大学史紀要』7(1990.3)
- 『東洋大学史資料目録』三(1990.3)
- 『哲学館事件関係新聞雑誌記事集成』(東洋大学史資料集第一, 1990.6)
- 『法政大学年誌』(1990.1)
- 『法政大学史資料集』第13集(1990.2)
- 『中央大学史紀要』第2号(1990.2)
- 『中央大学史資料集』第6集(1990.3)
- 『明治大学史紀要』第8号<特集・学徒勤労運動>(1990.5)
- 『神奈川大学史資料集』第6集(1990.3)

◇既刊案内◇

- 『中央大学百年史編集ニュース』第13号
(1989.12)
- 『中央大学史資料集』第5集(1989.12)

場 所 霞ヶ関ビル・東海大学校友会館
参加校 15大学(17名)
報 告 村山浩氏(東海教育研究所)
「東海大学50年史編纂と『松前文庫』発刊の主旨について」
コメンテート 竹市知弘氏(東海大学資料室長)
澄川晴大氏(東海教育研究所)
第4回 (1989年3月6日(月) 14時～16時)
場 所 日本女子大学成瀬記念館
参加校 16大学(17名)
報 告 秋山俱子氏(日本女子大学
成瀬記念館)
「大学史と展示－日本女子大学の場合」
見学 成瀬記念館展示「きものから洋服へ－日本女子大学の服装史－」
第5回 (1989年7月19日(水) 14時～16時)
場 所 中央大学駿河台記念館 510号室
参加校 21大学(28名)
報 告 岩淵文人氏(玉川大学図書館
学園資料室)
「学園史料室の史料収集と整理の実務について」
第6回 (1989年9月20日(水) 15時～17時)
場 所 中央大学駿河台記念館 510号室
参加校 24大学(31名)
報 告 水口政次氏(東京都公文書館)
「文書管理と公文書－東京都公文書館の事例－」
第7回 (1989年11月22日(水) 15時～17時)
場 所 中央大学駿河台記念館 620号室
参加校 24大学(35名)
講 演 長尾文雄氏(関西学院
学院史資料室事務長)
「年史編纂支援システムとしての資料室の課題」

ご案内

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。会則、会報創刊号などをお送りいたします（送料実費）。

<事務局>中央大学広報部大学史編纂課

〒192-03 東京都八王子市東中野742

☎ 0426-74-2132